

阮朝初期国家祭祀の一考察

高 津 茂

序

本稿に於いて筆者は次表に示す如くヴェトナム阮朝初期の祭祀を信仰の地理的分布から国家祭祀・地域祭祀・村落祭祀に分類し、全国的分布を持つ祭祀として三種の壇と三種の廟を指摘した。さらに、省境を越えた信仰のひろがりを持つ祠・廟・壇といった祭祀対象の中で、廟あるいは壇といった位置付けを持ったものを第1節に於いて国家祭祀として系列化の試みをし、第2節に於いてそれぞれの祭祀対象・沿革を簡見し、結論に於いて祭祀時期別分類とともに阮朝初期に於ける国家祭祀の持った性格を考えてみた。この小論はかかる作業を通して阮朝初期の宗教政策の一つである祭祀制の持つ一様相を明らかにせんとしたものである。阮朝初期に民衆の祭祀対象となったものは動物・植物・鉱物・山川・風雨雲雷・人間から諸神・諸霊・諸聖と種々あったように思われるが、史料上にその跡を見出し得るものは極く限られている。その意味では史料を通して知り得る祠廟がすでに民衆の信仰をすべて表しているとは言い難い。むしろ国家による祭統によって選別されたものであることを意味していると解される。このような制約は本稿で主に史料とした『大南一統志』（以下『一統志』と略す）、『北城地輿誌録』・『皇越地輿志』・『嘉定城通志』・『南圻六省地輿誌』・『同慶地輿誌』といった地誌類ばかりではない。正史としての『大越史記全書』（以下『全書』と訳す）や『大南寔録』（以下『寔録』と記す）に於いても同様である。その意味では個々の祀・廟・壇の性格研究が前提されなければ、祭祀の類型化は不可能とも思われる。しかし本稿では原則的に全国的な分布の広がりを持つ

か、祭祀内容に於いて在地性を持たないと思われる廟・壇のみを国家祭祀として規定した。本稿はかかる仮説の下に考察されたという点を御了承願いたい。

すなわち、具体的には全国的分布を持つ壇・廟とは社稷壇、先農壇、山川壇、文廟、啓聖祠、会同廟、城隍廟の七つの祠・廟・壇である。この中で啓聖祠だけが祠であって、他の六つは壇もしくは廟である。

啓聖祠はその在所が独立しておらず、常に「文廟之西」とか「文廟之左」もしくは「文廟之北」、「文廟之右」というように文廟に付随する祠として記されている。これは1913年に L. Aurousseau 氏が作成したハノイの文廟の図面にも一致している。また、『一統志』河内省、祠廟誌、文廟の項に、

啓聖祠在文廟之後，原陳黎胃監之所，嘉隆初改為祠，

とあり、啓聖祠は文廟の後にあって、陳朝・黎朝期においては胃監之所だったものを、嘉隆初年に至って改めて祠と為したことが知られる。さらに、『寔録』正編第一紀卷三十五、嘉隆7年（1808）の条に、

命禮部議定諸城營鎮文廟規式，廟制正堂三間四厦，前堂五間二厦，廟之右建啓聖祠三間二厦，

とあることから、文廟規式においても、啓聖祠が文廟に付属する祠とされたことが知られる。それゆえ、全国的分布をもつ祠・廟・壇の考察を進めるにあたっては、啓聖祠を除外するのが妥当であると思われる。

さて、全国諸省について啓聖祠を除いた廟・壇の分布をまとめると、表Ⅰの如くなる。この表から明かなように、ほぼ各省に、社稷壇、

阮朝初期国家祭祀の一考察

信仰のひろがりによる祭祀類型

祭祀類型	祭 祀 内 容	分 布 特 性
国家祭祀	社稷壇, 先農壇, 山川壇, 文廟(啓聖祀), 会同廟, 城隍廟	全国的に分布
	歴代帝王廟, 厲祭壇, 祈風壇, 火神廟, 河伯廟, 竜王廟	2省以上に分布
地域祭祀	傘円山神祠, 貴明神祠, 高山神祠, 三江神祠, 徵女王祠, 士王祠, 布蓋大王祠, 李太尉祠, 明空禪師祠, 他	1省内複数に分布
	邑眉祠, 衛国神祠, 貉竜神祠, 水神三位祠, 天策王祠, 忠誠神祠, 月娥女神祠, 媚醯夫人祠, 范尚書祠, 范子俊祠, 李皇太后祠, 陳明公祠, 矯三制祠, 范將軍祠, 黎榜眼祠, 郭尚書祠, 大乾聖娘祠, 空路禪師祠, 道行禪師祠, 韶防禦使祠, 蘇太尉祠, 威明神祠, 陳召文祠, 竜淵神祠, 滌江神祠, 三郎竜王神祠, 鄧国公祠, 他	
村落祭祀	隴淀祠, 江州祠, 春嶺祠, 棟麟祠, 核共祠, 觀朝祠, 清中祠, 阮督同祠, 三忠祠, 白帝祠, 虎牢祠, 梟門祠, 坡隆祠, 鎮北真武祠, 淇湧江祠, 左府祠, 沱漚祠, 坡維祠, 周栗祠, 筆山祠, 崑嶺祠, 田公山祠, 格淵祠, 坵壘祠, 陳郡公祠, 玉佩山祠, 丁大將祠, 靈慙神祠, 橫江神祠, 竜水堤神祠, 葉夫人神祠, 陳大將神祠, 綺羅神祠, 晴旭神祠, 広濟神祠, 明達公主祠, 嘉国公祠, 收陸二州学祠, 董冲天神祠, 董冲天神生母祠, 天真武祠, 輔国神祠, 呂使君祠, 仕邦侯祠, 灘瀬阜公祠, 懷道神祠, 阮梅庵神祠, 阮葉江神祠, 山神三位祠, 芹營神祠, 菩薩禪神祠, 女学士祠, 和侯祠, 阮使君祠, 三島山神祠, 早上古祠, 安所神祠, 同榜神祠, 梓檀帝君祠, 陳左相神祠, 春雷神祠, 節義狀元祠, 天祿祠, 理海祠, 節義榜眼祠, 馮舍祠, 李翁中祠, 朔天王祠, 威靈水神祠, 太陽公主祠, 昭応祠, 靈郎神祠, 白馬祠, 范太尉祠, 忠烈祠, 玉山祠, 有永神祠, 監察司馬祠, 他	1所1祠的分布

先農壇, 山川壇, 文廟, 会同廟, 城隍廟が一つずつ, 計三壇三廟が置かれている。このように三壇三廟が全国の省に分布していることから, それらが国家祭祀としての性格を有していることが推察される。更に, 一省三壇三廟制とでもいべき制度が存在したであろうことも窺われる。特に北圻十三省ではこのような体制が厳格であったようで一つの例外もない。それに比し, 開発が遅れ比較的支配の及ばなかった南圻においては, 京師から遠ざかるにつれて壇廟の数は減少している。

次いで祭祀内容に於いて在地性を持たないと思われる壇・廟は, 阮朝祭祀制を表わしている『大南会典事例』(以下『会典』と記す) 卷八十五 礼部 祭統祀分三等から知られ得る。すなわち,

社稷為大祀, 歴代帝王・先師孔子・先農為中祀, 風伯・啓聖・雨師・先医・周尚・父

姜太公・関公・天妃・都城隍・会同・南海竜王・占城国王・真臘国王・火神・礮神・邵陽夫人・河伯・后土・司工・開国功臣・中興功臣・忠節功臣・山神・湖神・島神…

とあるとおり, 上記の壇・廟は国家による祭祀を統べる性格を持ったものと考えられる。本稿では紙数の制約からその総てを論述することはできない。よって, 三壇三廟の他は広い意味での皇帝の宗廟祭祀と天地神祇への祭祀を中心として論述する。

第1節 国家祭祀の系列化の試み

本節では国家的性格を持つ祭祀としての壇・廟の地理的分布を検討すると共に, 祀られている内容を通して壇と廟との相互の関係を考えてみたい。

壇・廟には表Iから明らかなように, 全国的

に分布していた三壇三廟がある。また、一ヶ所または数ヶ所においてしか祀られていないが国家祭祀と考えられる壇・廟には次のようなものがある。すなわち、南郊壇、迎春壇、祈風壇、厲祭壇、恩祀壇の五壇及び五十種の諸廟すなわち、歴代帝王廟、原廟、澄国公廟、武廟、啓廟、中興功臣廟、開国功臣廟、忠節功臣廟、三座廟、神農廟、谿竜君廟、竜王廟、南海竜王廟、河神廟、河伯廟、海霊廟、雨師廟、祈風廟、火神廟、火燄神廟、関公廟、等が地誌類に見出し得る。

三壇三廟については表1によってその分布を見たが、北圻においてはこの祭祀が厳格に適用されているのに対し、中圻では、寧順道を例外として^①、大よそ適用されているにすぎない。また中圻各省においては文廟祭祀が省のレベルのみならず、府や県のレベルにまで及んでいるために、表1上での文廟数は他地域に比して特異なまでに大きな数字となっている^②。南圻においては、南下すればするほど三壇三廟の祭祀がゆるやかになっている。すなわち、辺和、嘉定の二省において山川壇を除く二壇三廟が見られ、定祥、永隆の二省においては、山川壇と文廟を除く二壇二廟が設けられている。しかし、さらに南下すると安江省には城隍廟が、河僊省には会同廟が祀られているだけである。これは阮朝初期の南圻に対する支配の模様を如実に物語っているように思われる。辺和、嘉定両省の管轄する地域は東は平順省境から西は虬澳江によって定祥省界に接するまでの地域である。同地域は、古くは娑利国や扶南国の地で後には真臘の併せるところとなった。ここにヴェトナム人の支配が及ぶに至ったのは、太宗考哲皇帝（1649—1687、在位）が己未年（1679）に初めて辺を開き屯を新たに美郷の地に建立することを命じ、次いで顕宗考明皇帝（1692—1725、在位）が戊寅年（1698）に阮有鏡に命じて同地を経略させて嘉定府を置き、現在のホー・チ・ミン市である柴棍の処を以って新平県となしてからのことである^③。このような辺和・嘉定の沿革に比して、虬澳江を越えメコン川前江に及ぶ定祥・永隆両省の建置沿革には大きな相違がある。定祥

省はもっぱら明の竜門将である楊彦迪等の明朝の遺臣によって太尊皇帝己未（1679）年以後に開発された地であり、永隆省は肅宗皇帝壬子年（1732）に竜湖宮を置き、世尊皇帝丙子年（1756）にカンボジア国王匿源より尋敦・欽鼠の二府の地を献ぜられた地である。この建置沿革の差はメコン川を越えて安江・河僊両省となるとさらに大きなものとなる。すなわち、安江省は世尊考武帝丁丑19年（1757）に匿源より献ぜられた地に民を募って居住させた地であり、河僊省は広東人鄭玖や諸国商人が流民^④と共に集団をなして七社に居住していたものを顕尊考明皇帝甲年（1714）に阮朝に内附するを求めてきたために河僊鎮総兵に封じたことに阮朝支配が始まる地である。このような阮朝支配の同地に及ぶに際しての沿革の差と、また南部の中でもメコンデルタに当る定祥・永隆・安江・河僊各省は冠水するために余り開発は進まず、明命年間に至って徐々に同地の経略に着手されたという風土の差とによって阮朝支配に差異を生じたものと思われる^⑤。これはドンナイ平野を中心とする辺和・嘉定両省に関しても言えることで、明命年間までは両省には軍事植民都市としての嘉定城の前身が位置したにすぎない。

以上瞥見したように、南圻六省はその建置沿革においても新しく、阮朝支配も浸透していなかった。そのため、辺境に至るにつれて三壇三廟の祭祀が確立していなかったのは自然なこととして解し得る。それ故、三壇三廟の分布における南圻の特異性は、阮朝初期の政治地理上の理由に由来するものと解することができよう。それゆえ、基本的には北圻・中圻にみられるように三壇三廟が全国的な国家祭祀の中核として、各省に設けられたものと筆者は思う。

次に三壇以外の五つの壇について見ると、南郊壇と恩祀壇が京師に、迎春壇が富安省に、厲祭壇が河静省と富安省に祈風壇が辺和省に位置している。祈風壇を除く他の四つの壇は中圻に位置しており、中でも行政の中心地である京師に設けられた南郊壇と恩祀壇は祭祀体制の中にあっても中心的位置に立つものと思われる。

(1) 南郊壇⁶⁾：まず南郊壇について検討を加える。Leopord Cadière 氏は南郊壇の研究の中で、「天の至上の力に対する感情はヴェトナム人の宗教意識に滲み込んでおり、天命を窺うことにより、事の成否・吉凶・人生・運命等のすべてを知り得るものとヴェトナム人は考えている。そして、天命を窺い得るのはこの南郊の祭祀においてであり、皇帝は国家を代表して祭祀をなすのである」と述べている⁷⁾。このことは『会典』巻八十五 礼部 祭統 の項に

南郊・社稷為大祀

とあり、また『歴朝憲章類誌』（以下『類誌』と略す）巻之二十二 礼儀誌郊祀天地之礼にその沿革を記してあることから首肯される。さらに、『類誌』巻之二十五 礼儀誌 祭告祈禱之礼 社稷壇^{風雨雲雷}・高媒壇の項に、

李仁尊竜符五年(1105)、春祈高媒、按礼、社祭土神、稷祭穀神、其壇在国都之右、高媒先媒之神、祀在南郊、禋祀上帝則配之とあることから、その沿革において社稷壇も南郊である昇竜城長広門外において祀られたことが知り得る⁸⁾。それゆえ、筆者は私見ではあるが、社稷壇と南郊壇は何らかの近似性のあるものと思っている。すなわち、『礼記』の祭儀や『周礼』の小宗伯に言うところの社稷を右に、宗廟を左に祭る周王朝や諸侯において支配権力の祭祀として成立した思想がヴェトナムに移入され、阮朝初期においては、周が宗主として封建諸国に社稷の祀を分つのに比して、各省に社稷壇が設けられ、祭祀が統べられたように想われる。そして中国においては後漢以後は形式化したとされる⁹⁾社稷の祭礼が、その背景に於いて異なるヴェトナム社会に適用されたものが南郊の祭祀と全国的分布を見る社稷壇ではなかったかと筆者は思っている。その沿革・祭祀内容については後述するが、Cadière 氏の研究からも、南郊壇は国家的祭祀の頂点に立つものと筆者は思う。

(2) 恩祀壇¹⁰⁾：次に京師に設けられた恩祀壇について見ると、『一統志』京師 羣廟の同壇の項に

在中興功臣廟之左後、西向旧忠節功臣壇所、明命元年(1820)設、致祭内外死事官兵。正中設牌位一題、本朝勤勞王事職官列位之靈、左右各設牌位一竝題、勤勞王事吏卒之靈、東西相向、歲以春秋祭功臣、後乙日命承府官致祭

とあることから解るように、同壇は内外で死んだ官兵、王事に勤勞した職官や吏卒といった功臣を祭ったものである。同壇は功臣祭祀系列の中では唯一の壇であり、京師において承府官による致祭であることから全国の功臣や忠臣を祭祀する頂点に立つ性格を持ったものであると思われる。この恩祀壇と諸功臣祭祀によって阮朝は文武両者の官僚達を下は兵卒吏卒に至るまで刻苦勉励せしめ、信賞必罰・酬功報徳の理念を徹底せしめんとしたものと思われる。

(3) 迎春壇¹¹⁾：次に富安省に位置する迎春壇について見ると、André Coué 氏は同壇に於ける祭礼を「農業を保護するための祭祀であり、春になり晴天の再びめぐってきたことを祝うものだ。」としている¹²⁾。またその祭祀は「皇帝が省城の東に位置する同壇へ儀仗を以て赴いて執行され、未来の繁栄のしるしに祭壇上に番人をつれた牛を型どった粘土の人形が並べられ、種々の供物が祭礼につれて献ぜられる」ことが紹介されている。この Coué 氏の論によれば、迎春壇の持つ性格は、皇帝により祭祀されるという性格から農業生産の豊穰を祈念したものである。それゆえ各省の先農壇¹³⁾の頂点に立つ国家祭祀と筆者は思う。農業生産に基礎を置くヴェトナムに於いては重要な祭祀であったものと思われる。ただ、この壇が何故皇帝の居城地である京師ではなく富安省同春県平隆村に在ったのかは解らない。後考を俟つ。

(4) 厲祭壇¹⁴⁾：次に河静省と富安省に位置する厲祭壇について見ると、鬼神を祀る同壇が何故に河定省と富安省に位置するかは解し難い。国家的祭統の頂点として同壇を理解しようとするなら何故二つの壇が設けられる必然性があつたのかも解し難い。両者が特に疫病や禍災や祟りの多い地ということは筆者は寡聞にして聴かな

い¹⁰⁹。同壇の地理的特性に関しては後考にゆだねたい。

(5) 祈風壇¹¹⁰：最後に祈風壇であるが、同壇だけが南圻の辺和省に位置している。『一統志』辺和省誌の同壇の項に、

祀南海王鱗竜王・河伯・風伯・雨師¹¹¹・雷公・雷母・海若馮夷・竜女・賓妃諸神。常年春秋首致祭

とあることから、そこでは単に風のみが祀られたのではなく、風を起こす原因と考えたであろう南海玉鱗竜王と、そこに集ったとヴェトナムの民衆は考えたのであろう河伯・風伯・雨師・雷公・雷母・海若馮夷・竜女・賓妃といった諸神とが祀られていることが知られる。同壇は嘉隆年間（1802—1819）に建壇されているが、水真臘やクメール族の故地であった南圻における霊神の特異な地域性を窺わせ興味深い。これは、黎末から阮初にかけての南圻開発にともない、同地の在地の霊神の加護と鎮撫を併せ願って南圻における唯一の壇として建壇されたことが窺われる。

以上社稷壇・山川壇・先農壇以外の五つの壇の地理的特性について簡単に言及した。

次に国家祭祀の一つと考える廟の地理的分布について見てみたい。

(1) 歴代帝王廟¹¹²

まず史料より明らかにし得る50種の廟の内29は歴代帝王廟である。このうちの占城国王廟2廟と真臘国王廟1廟の2種の廟三つを除いた27種の廟はほぼ北圻に集中している。すなわち、中圻には清化省に趙越王廟、黎大行皇帝廟、黎諸帝廟が、乂安省に安陽王廟が、京師に黎聖尊廟と歴代帝王廟があるのみで、南圻には一廟もない。このように北圻、とりわけ、平野部に同廟が集中していることは¹¹³、阮朝以前の諸王朝が北圻をその支配地域としていた事からも自然なこととして首肯し得る。

(2) 水神系列の諸廟¹¹⁴

次いで多いのが水との関係を窺わせる諸廟である。すなわち竜母廟・竜王廟・南海竜王廟・海霊廟・河神廟・河伯廟・雨師廟・風伯廟・祈

風廟である。それぞれの所在する省を検討すると、南海竜王廟・河伯廟・風伯廟・雨師廟の四廟が京師に在ることが解る。その他、定祥省と広平省に竜王廟が、河僊省に海霊廟が在り、祈風廟が南定省に、河神廟が山西省に、竜母廟が広安省に在る。京師の南海竜王廟は初めは香水県陽春社に在ったものである。南定省の祈風廟と山西省の河神廟の祭祀対象は不詳だが、前者は辺和省に於ける祈風壇や風伯廟から類推すると、南海竜王と関係するものと思われる。また、後者は白鶴県越池村に位置しており、『同慶御覽地輿誌図』同県の図による¹¹⁵と瀘江と洮江の接する両江江口部に位置している。このことから河神廟の祭祀対象は同江であるものと思われる。次に広安省の竜母廟であるが、『広安省地輿志草本略抄』の古墳、竜母廟の項に、一人の寡婦が桑園に草を鋤きに行っていて、たまたま樹の下で憩んでいたら感ずる所があり、月が充ちて三つの卵を産んだ。怪んで之れを埋めてしまった。数十日して再び草を鋤きに行ったおり三尾の蛇がとぐろをまいてのに出会った。その蛇は彼女の足に繞みついて離れなかった…(中略)(この蛇を)水神として、各社で廟に祀ったところ、いつも靈応が著しかった。そこで両岐社では廟を立てて其の(蛇の)母を祀ったとのことが記されており、この相伝から同廟が、竜と型体が似ていると思われる蛇が水神となったことから、蛇を産んだと伝えられる寡婦を竜母として祀ったことが知られる。この相伝は民衆の中に竜と水神をつなぎあわせて考える発想があったことを前提として成り立っているが、この発想は中国・日本等に広く見られ、ヴェトナムの地理的特異性を示すものではない。以上のことより、国家祭祀の対象であると思われる廟においても、極めて在地的性格を持った信仰が取り込まれていることが北圻における山西省の河神廟と広平省の竜王廟の例において見ることができるものと思われる。祭祀対象不詳の南定を別にすれば中圻南圻に位置する竜王廟・河伯廟・風伯廟と海霊廟は南海竜王と直接もしくは間接に関係を持っていると言い得ると思

う。このことから南海竜王に対する信仰が単に南圻だけでなく中圻にまで及んでいたことが知られる。さらに、廟中に山神の系列に属するものを見出し難いのに対し南海竜王を中心とする水神の系列に位する祭祀に国家祭祀の性格を持つと思われる廟の多いことも注目して良いものと思う。

(3) 宗廟祭祀系列の諸廟²⁴⁾

次に多い廟は、宗廟である。すなわち、太廟・世廟・肇廟・興廟・恭宗廟と原廟、澄国公廟である。その地理的分布は原廟と澄国公廟が清化省に位置するのを別にすればすべて京師に位置する。それも恭宗廟以外は皆皇城内に位置しており、皇帝の宗廟としての特殊な性格を物語っている。原廟と澄国公廟のみが清化省に位置するのは清化省が黎莊宗・中宗等の故地であるためと思われる。原廟には阮朝にとって、王業開基者たる肇祖靖皇帝と太祖嘉裕皇帝を奉祀しており、澄国公すなわち阮阮淦の父を祀った澄国公廟は原廟の左に位置している。その諸節礼は京師にある列廟の例によって省官によりなされた。この建国始邦の祖を祀った原廟と京師に位置する五廟に対する祭祀は、祖宗の威霊を奉じて政治を行い祖功に報いんとした周代宗廟の制の理念を継承しているように思われる。本稿では中国における祭祀との比較が目的ではないが、先に述べた南郊壇における祭祀と周代の郊祭の類似、社稷壇の全国的分布から解される同壇の重視、上述した宗廟の制の重視といった点を考えるとその理念において中国周代の祭祀の制にヴェトナム阮朝期祭祀は近い性格を持っているように思われる。私見に及ぶが、このことは、ヴェトナムにおいて儒教を受容する際の基礎史料が常に四書五経であり、中国ほどに解釈が発展しなかった為、中国では後漢以降形式化されたと言われる祭祀の礼が阮朝初期のヴェトナムにおいては同時代の中国以上に盛んであったものと思われる。本稿では、礼を国家統治の基本と考える儒家の政治学がヴェトナムへ移入・展開した結果として、上記の類似とその一解釈をもたらした点を示すに留め、両国祭祀の比

較については、別論に譲るものとする。

(4) 功臣祭祀系列の諸廟²⁵⁾

次に多い廟は功臣に関する廟、すなわち、中興功臣廟、開国功臣廟、忠節功臣廟の3廟である。その地理的分布をみると、3廟とも皆京師に在ることがわかる。この3廟は壇と廟との関係から、また後述する祀祭者の階品の差から先に論じた恩祀壇の下に位置するものと思われる。その祭祀内容と沿革については次節に於いて論ずるが、その分布が京師に集中していることは興味深い。

(5) その他の諸廟

残りの8種10ヶ所の廟は関公廟が乂安・宣光・興化各省に位置し、他7種は関聖廟が北圻の南定省に、後は中圻に位置している。すなわち、平順省に神農廟が、富安省に啓廟が、広平省に三座廟が位置しており、京師には武廟・火神廟・火礮神廟が在る。

i) 関公廟・関聖廟²⁶⁾：関公廟・関聖廟の異同は不詳だがその分布は乂安に在る関公廟の一つを除き、共に北圻を中心としている。

ii) 神農廟²⁷⁾：平順省の神農廟に関しては、その祭祀対象に於いて炎帝・黄帝・后稷の三位を祀ったもので、中国の三皇五帝の神話に依るものと思われるが、伏羲が入っていないことが興味深い。このような中国に起源を持つ廟が平順省禾多県平水村に位置しているのは、同地が旧藩郎の地であり南は海に面すると共に中国人が居住していた地であることから「漢蛮」²⁸⁾の信仰する所となっていたものを阮朝においても廟として祭祀したものと思われる。

iii) 啓廟：富安省にある啓廟は、文廟と共に祀られていることから啓聖祠のことと思われるが、何故廟であったのか、また廟であったとしたら何故富安省でなければならなかったのかは解し難い。富安省は先に見た如く迎春壇や厲祭壇も置かれていることからすれば、何らかの宗教地理学上の意味を持った省なのであろうか。後報を俟つ。

iv) 三座廟²⁹⁾：広平省に在る三座廟については、その祭祀内容が不詳である。

次に京師に位置する武廟と火神廟・火礮神廟であるが、

v) 武廟²⁹⁾：武廟は文廟に対して設けられたものであり、京師において全国の武官を祭祀するために設けられたものと思われるが詳細は明らかでない。

vi) 火神廟³⁰⁾：火神廟は『一統志』京師誌同廟の項に地方官の致祭になるものであることが明記されており、同廟が地域的信仰に基礎をおくものであることを窺わせる³¹⁾。

vii) 火礮神廟³²⁾：火礮神廟に対する祭祀は神機管衛の致祭になるものであって、鉄砲や大砲といった武器を司る神という地域性を持たない性格であるため、京師において立廟致祭したものと思われる。

以上のように廟を概観すると、歴代帝王廟系列、水神（南海竜王）祭祀系列、宗廟祭祀系列、功臣廟祭祀系列、関公廟祭祀系列、他に分けることができるものと思われる。また、内容において類似すると思われる宗廟祭祀系列と歴代帝王廟系列は分布からは全く異なった系列に在ることが解せられる³³⁾。以上の諸系列の主要な分布地域を記すと表Ⅱのようになる。表Ⅱ中の諸廟の祭祀系列はその祀られている内容から、先の壇と次のような対応を持つものと思われる。すなわち、

- | | |
|------|------------------|
| 南郊壇— | { i) 宗廟祭祀系列の諸廟 |
| (中央) | { ii) 全国に分布する社稷壇 |
| 恩祀壇— | 功臣祭祀系列の諸廟 |
| (中央) | (中央) |
| 祈風壇— | 水神（南海竜王廟）祭祀系列の諸廟 |
| (南圻) | (中央) |
| 迎春壇— | 神農廟と全国に分布する先農壇 |
| (富安) | (平順) |

以上がその内容から類推した縦の関係である。中でも全国各省に分布する社稷壇と宗廟祭祀を合せ持つ南郊壇は国家祭祀の中核に位置し、天下を治める皇帝によって諸神の祭祀が統合されていく基幹となるものと思われる。しかし、逆に郊祭によって抜け落ちた祭祀、もしくは地域性の強い祭祀には別に壇や廟を設けたことが、

各系列の壇・廟や系列化し難い壇・廟の存在から窺い得る。このような地理的分布を中心として見ると、阮朝初期には国家祭祀が体系的性格をそなえていたものと思われる。

第2節 国家祭祀の祭祀対象と祭祀内容について

本節では、その祭祀対象と祭祀内容を瞥見することで阮朝初期国家祭祀の内容を窺ってみたい。

1) 南郊壇：南郊壇が皇帝による天地を祀った祭祀であるということはすでに述べたところである。阮朝期の同壇は嘉隆五年（1806）に京城外の南郊にある安旧社に南向きに建てられた。同壇は碑石によって三成の壇が積み重なっている。その構造は三層のピラミッド様である。その第一成と第二成に祀られた祭祀対象は表Ⅲのように整理できる。表Ⅲより明らかな点は、まず第一成の正中に天地が合祀されており³⁴⁾、その下に一、二、三と阮朝歴代皇帝が左右に奉ぜられている点である。上帝に天地を祀るその第一成に阮潢・嘉隆・明命・紹治・嗣徳の皇帝が奉ぜられていることの意味は、天子としての位置を表わしたものと思われる。それは第二成の諸祭祀対象の上に皇帝が位置していることから窺い得よう。また、左右に分かれていることの意味は第二成の祭祀対象から明らかであるように祭祀対象の陰陽にあったと思われる。すなわち、天地を中央とし第一、第三、第五世が列して陰に通じる。宗廟祭祀における昭穆に似たものであり、父子の世代者異班の制度が壇の祭祀順位に適応されて左右して置かれているように思われる。次に来る第二成はまず初めに太陽を左に、月を右に奉じて祀り、二番目に凡二十八宿及び諸星が皆左行して一日一夜で天をめぐるという天上の星の運行を左に奉じ、山と海、河や沢という地上の自然の景観と、阮朝の歴代の皇帝の山陵の位置する山の山神を右に祀っている。さらに三番目には雲や雨、風や雷といった気象・天候を左に奉じ、丘や低地といった地面の起伏を右に祀っている。

そして四番目には十二年をもって天を一周する木星と日月の相い会するという天体運行の時間的規則性を左に奉じ、あらゆる天地の神々を右に祀っている。このことから第二成は左に天上を右に地上の諸々の現象を祀っており、この祭祀対象の多くが中国にその起源をたどることのできるものであり、ヴェトナムの皇帝が天に代わって宇宙の森羅万象を司るという理念を中国的宇宙観によって象徴的に表わしたものである。またこの南郊壇の建壇により、この宇宙の森羅万象を祀る祭祀大権の保持者として皇帝の宗教的権威を基礎付けるとともに、階品等級制の頂点に立つ政治的権力者として皇帝の権威が確立されたことを窺い得る。

- 2) 社稷壇⁹⁴⁾：社稷壇が社と稷、すなわち播種・収穫の農祭や村落の集会の行なわれる場所である社と穀神である稷を祀ったものであることは先に述べた。同壇は『周礼』考工記に左祖右社とあるように、京師にあっては京城内の西南の凝績坊に在る。京師においては、嘉隆五年（1806）に建壇され、その壇制は二成からなっている。第一成は正中二案が奉ぜられている。すなわち、その祭祀対象は次のような神位である。

左	右
太 稷 神 位	太 社 神 位
后 稷 氏	后土勾龍氏

この社稷の両神が一壇に祀られていることからヴェトナム阮朝初期における社稷壇の壇制は1377年（洪武十年）以降中国において社と稷を不可分の神として一壇制に改められたものによったことが知られる。このことは、二壇を上下に重ねた二成から成り、上壇の上面を黄土、四方の側面を東は青、南は赤、西は白、北は黒色の土で仕上げてあるという形態的類似からも首肯される。またその祭祀対象も中国王朝の祭祀に習ったものであることは

言うまでもないことであろう。同壇は先にみたように、ヴェトナム全土に一省一壇ずつ分布していたが、その建壇期は表Ⅳから知られるように明命十三年（1832）に中圻諸省を中心として七壇二十五％が、明命十四年（1833）に北圻諸省を中心として十二壇四二・九％が分布している。ただ『一統志』京師「壇廟」同壇の項に、謹按嘉隆五年（1806）として、命諸宮鎮、各貢淨潔、寒土營築。歳以春秋二仲月上戊日、薦詣行礼

とあることから。嘉隆五年（1806）にはすでに營築の命がでたにもかかわらず、明命十三年に至るまで、京師以外の諸省では、同命は履行されなかったものと思われる。明命期に至ってやっと支配権力が確立し得たのであろうか。同壇の致祭時期と致祭者は、『一統志』京師「壇廟」同壇の項に、明命三年（1822）準以春祭郊後戊日。秋祭上戊日。遇有慶年親詣行礼、余簡派大臣充之。

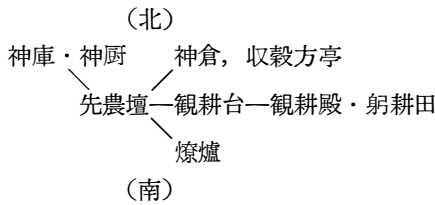
とあることから。致祭時期は春祭が南郊の祭祀の後の戊の日であり、秋祭が上旬の戊の日であることが知られ、致祭者が通年は選ばれて派遣された大臣であることが知られる。

- 3) 先農壇⁹⁵⁾：同壇が豊穰を祈念するための壇であることは先に述べた。京師において同壇は京城内の西北に位置する厚生・安宅二坊に、明命九年（1828）に建壇された。その正中の門額に

内曰帝命率育、外曰為天下先牆

とある。このことから門の内側に「帝命率育」とあって速かに育つことを命じ、門の外側には「為天下先牆」とあって、天下に先んじて牆を為すといった共に五穀豊穰を祈念すると思われる内容の篇額が掲げられていたことが知られる。また同壇の周囲には下図のような諸建造物があって、これらの建築物の名からも農業祭祀としての性格を窺い得る。

また、全土の一省一壇的分布を持つ同壇の建壇期を整理すると表Ⅴのようになる。この表より、南圻を中心とする諸省の先農壇は明命十三年（1832）に五壇十九・二％、中圻・北



圻を中心とする諸省の先農壇は十一壇四二・三％分布していることが解せられる。また、その致祭者については『一統志』京師「壇廟」同壇の項に

謹按明命八年（1827） 聖祖仁皇帝議復古制，開耜田行躬耕礼。歲以四月下旬，擇吉举行承天府尹。欽命致祭

とある。このことより明命帝が古制に復して耜田を開き自ら耕礼を行なったことが知られると共に、祭祀時期が四月下旬の吉日であったことが知られる。

- 4) 山川壇⁹⁰：同壇が全国の諸省にわたって一省一壇の分布を持つことは先に論じた。承天府においては香水県楊春上社に位置し、その祭祀対象については『一統志』承天府「祀廟」同壇の項に

祀境内名山大川之神

とあることより、名だたる山や大きな川が祀られていたことが知られる。この山川の祭祀は南郊壇の第二成の右配，第二案に奉ぜられている。それゆえ、南郊壇における祭祀対象の一部をなすと共に各省にあって、その省中の山川の諸神を司るものとしての性格を備えた壇であることが窺い得る。承天府における建壇は嗣徳五年（1852）であるが、全国各省の建壇期を整理すると表Ⅵのようになる。この表から中圻北部から北圻にかけての諸省十祠四十一・七％が嗣徳五年（1852）に、北圻を中心とする諸省八祠三十三・三％が嗣徳六年（1853）に建壇されたことが知られる。それゆえ嗣徳五・六両年で山川壇の四分の三が建壇されたことが知られ、先の社稷壇・先農壇が明命帝の宗教政策と密接に結びついていたと思われるのに比し、山川壇は嗣徳帝の宗教政策として全国諸省に分布していたものと

言えよう。このことは全国の山川壇のうち、九十一・七％が嗣徳期に建壇されたことから首肯されよう。

- 5) 文廟⁹¹：文廟が全国諸省に一省一廟的に分布することは前節ですでに述べた。文廟は京師においては京城外の西，安寧社に位置し、その祭祀対象は、正中に至聖先師孔子神位を奉じ左右に顔子・会子・子思・孟子の四配の神位を設けている。さらに東西には孔子門下の十哲である閔損・冉耕・冉雍・宰予・端木・冉求・仲由・偃卜・商顓・孫師を祀っていた。明命十八年（1837）には有若と朱熹の二位を列して十二哲神位を奉じた。また、東西の廊には、先賢・先儒を庭前に従祀し、亭に碑を二つ建ててあった。このような祭祀対象から、同祠が儒教の至聖たる儒教理念の体现者達，すなわち儒家に対する祭祀をその内容としていたと解される。『一統志』京師「壇廟」同廟の項によれば、

国初文廟在朝山社，祀以神像。睿尊庚寅五年（1770）移干隆湖社。

とあり、初めは朝山社に文廟が在り、神像を祀っていたのを睿尊の庚寅五年に隆湖社に移したことが知られる。また、

嘉隆七年（1808）移分所，埋藏神像。改題牌位，歳以春秋二仲，上丁親祭

とあることから、嘉隆七年（1808）に現在の安寧社に移建すると共に、神像を埋めてしまい、改めて牌位を題したことが知られる。これは、文廟が嘉隆七年以前には先賢・先儒を祀る場ではなく、埋蔵せねばならぬような神像を擁する廟であったことを推察させる。また、その祭祀時期も春秋二仲をもって致祭され、その析は上丁によって親祭されることから、嘉隆七年（1808）以降に文廟が国家祭祀としての特徴を持つようになったことを示している。翌、嘉隆八年（1809）には、

準以丑辰，未戌，每三年一親祭，命文班大臣撰祭

とあり、三年一回の親祭があったが、文班大臣に撰祭を命じたということが知られる。こ

のことより、文廟祭祀における致祭者が、皇帝もしくは、代理としての文班大臣であったことが知られる。また明命・紹治・嗣徳年間には列聖を奉じ、時に当っては常に皇帝が自ら文廟に往って釈奠の礼を行ない、視学をなすを命じたことが『一統志』壇廟、同廟への按語より知り得る。これより、同廟が学問の場、学事を司る場すなわち儒教の殿堂として奉祀されていたことが解る。阮朝期科举制度をめざす各省文紳達のメッカであったのがこの文廟なのであろう。それゆえ、文廟の全国的な分布は、儒学のみならず儒教イデオロギーの全国諸省への敷衍を意味するものと思われる。その建廟期もしくは移築時期を整理すると、表Ⅶのようになる。この表Ⅶよりどの時期に集中して建廟されたものでもなく、ほぼ一年一廟ずつ建てられたり、修築、移築されていたことが知られる。嘉隆期が十二廟四十四・四％、明命期が八廟二十九・六％、紹治期は二廟七・四％建廟・修築・移築されている。このことから文廟祭祀は嘉隆・明命・紹治の三期の宗教政策に共通してみられるが、とりわけ嘉隆期が盛んであったと思われる一方、嗣徳期には一廟の建廟・修築・移築もないことから、嗣徳期の宗教政策においては文廟祭祀があまり重視されなかったことが解る。

次に、啓聖祠についてその祭祀対象を整理する。啓聖祠が文廟に付随して祀られていることは先述したが、京師においては文廟の西・隆湖社の文廟の旧址に、嘉隆七年(1808)に作られている。その祭祀対象は、正中に啓聖公の位を奉じ、東西に先賢として顔氏・会氏・孔氏・孟子・孫氏の四位を配し、また先儒として程堯朱松・周輔成・張迪の四位を従祀している。致祭者は国子監学官であり、公堂は官に委されていて歳除・正旦・端陽・朔望等の礼には一堂に会することが命ぜられていたことが『一統志』京師「祠廟」啓聖祠の項より知り得る。

- 6) 城隍廟：城隍廟の地理的分布については第1節において述べた。ここでは京師における

都城隍廟⁸⁾の祭祀対象を整理することでその祭祀内容を考察するとともに、阮朝初期における建廟期の分布を調べることで、城隍廟祭祀の中心時期を明らかにしたい。京師における都城隍廟は、京城内の西側衛国坊に在る。嘉隆八年(1809)に建廟されたもので、その祭祀対象は正中に都城隍を、左右に諸省の城隍を配してある。城隍神は道教の五皇大(上)帝の部下の神として土地神・鎮守の神として祀られた。村落の亭で祀る祭神も城隍としてゐる。十九世紀初期においても城隍神が多すぎたのか、『一統志』京師「祠廟」都城隍廟は、明命二十年(1839)に

裁省配位

として、城隍の配位を省き減らしている事を伝えている。その致祭時期は春秋二仲であり、社稷壇祭礼後の庚の日であり、武階官が致祭者となって祀った。この城隍廟の建壇期を整理したものが表Ⅷである。表Ⅷから、城隍廟は嘉隆元年(1802)から明命十七年(1836)まで中圻を中心とする臨海の八つの省に三十九年間に八廟が建てられている。ところが紹治年間に入ると、紹治元年(1841)と紹治二年(1842)に北圻と南圻を中心に各々七廟ずつ(二十二・六％)十四廟(四十五・二％)が建てられ、紹治期の六年間に十九廟、六十一・三％が建てられていることが知られる。それゆえ、阮朝初期の各王朝期に共通してみられる建廟であるが、とりわけ紹治期に飛躍的な建廟を見ることから、紹治期の宗教政策と特に結びついたものであることを知り得る。

- 7) 会同廟⁹⁾：会同廟の地理的分布についても第1節で述べた。ここでは京師における会同廟の祭祀対象をまず整理し、それによって全国諸省に位置する会同廟の祭祀対象と祭祀内容を考察し、次いで会同廟の建廟期を整理することで阮朝初期における会同廟祭祀の祭祀時期の特徴を考えてみたい。京師における会同廟は承天府の会同廟を合祀して朝山社に位置している。嘉隆二年(1803)に順安汎に建てられたものを明命七年(1826)に朝山社に

移したもので、その祭祀対象を整理すると表Ⅹのようになる。この表から正中、並びに左右の間においては上・中・下の三等に分けられた陰陽の神⁴⁰を祀り、東の旁屋においてその地の土地・竜神・玉方・河伯・水官の諸神位を祀り、西の旁屋においては先師・土公・龜君・住宅の諸神位が祀られていることが知られる。また、陰陽の上・中・下三等⁴¹の諸霊神の他にも開国に際しての功臣が祀られたことが『一統志』辺和省「祠廟」会同廟の項に

祀本境靈神 並開國初文臣武将之有功者、
凡六十八人

とあることから知られる。これは文臣・武将の中で国初に功のあった者がその地方の陰陽の神、もしくはそれと並んで考えられたものと思われる。すなわち、功臣は諸霊神同様に当該地方の諸神位に等しい位置を与えられ、祭祀されたものと思われる。このことから、会同廟における祭祀内容が、各地域の自然一般を司る諸神や諸霊神ばかりでなく、功臣をも含む生活を鎮める諸神祇であったと思われる。次に会同廟を建廟期によって整理すると表Ⅹのようになる。全国31省に分布する会同廟の中で建廟期の明らかなものが29廟あり、建廟年の分布においては、とりたてて顕著な建廟年を見ることはできないものの、皇帝の治世別に見ると次のような特性が理解できる。すなわち、嘉隆期に14廟 45.2%、明命期に11廟 35.5%が集中している。これに対し黎末をも含め、紹治期、嗣徳期は各々1廟 3.2%しかその建廟がみられない。このことから会同廟祭祀が阮朝初期、とりわけ嘉隆・明命年間に普及したことが知られる。

- 8) 歴代帝王廟⁴²：歴代帝王廟は京城外の南、陽春社に位置し、明命四年（1823）に建てられた廟である。本節ではその祭祀対象についてみてみたい。すなわち、表Ⅺのように歴代帝王廟における祭祀対象を整理することができる。表Ⅺより、中一室においては中国古代神話中の諸神が祀られ、左・右の一・二室に

年代順にヴェトナム史上の諸賢帝が並んでいることが知られるとともに、東西の廡には中国とヴェトナムの名だたる功臣が祀られていることも知り得る。ヴェトナム歴代皇帝全員が祀られているのではなく、事績の顕著な皇帝と考えられた者のみ16名が祀られているだけである。16名中3名は神話中の神であり、13名のみが実在した皇帝である。ただし、13名中の土王を皇帝と認めるか否かについては異論のあるところであろう⁴³。本稿では阮朝初期民衆にとって土王が皇帝として位置したものと考え、皇帝13名中に数えた。13名の抽出の仕方は専らその事績によると考えられ、昭穆等は認め難い。中一室において祀られている中国古代神話中の諸神とヴェトナム諸皇帝との関係は、『全書』外紀全書 卷之一 鴻臚紀 涇陽王の記に

涇陽王 諱祿續。神農氏之後也。

壬戌。元年。初炎帝神農氏三世孫帝明。

生帝宜。既而南巡至五嶺。接得嫫嫫女生王。とあることから、ヴェトナム神話中の初代皇帝が神農氏の末裔に連っていることが知られる。すなわち、ヴェトナム皇帝は中国皇帝と同じ神話上の祖を持っているとの伝承があり、その系列の下にヴェトナム各王朝が位置し、その伝承を通じて民族精神を発露させたものと思われる。明命11年(1830)には土王を文廟従祀之列に祀り、黎英尊一位を省いている⁴⁴。また明命16年（1835）には太公望を武廟の正案に遷祀し、春秋二仲の吉日をえらんで祭日として賀詣行札するか、皇子諸公が致祭している。また正旦と端陽の札については文官三品以上を一人簡派して行札せしめている。ただし、端陽の札については明命7年（1826）から始まったものの明命11年（1830）には省かれている。以上のような祭祀対象・祭祀者をみると、歴代帝王廟は、各皇帝の専廟・専祠を包含・代表する立場にあって中央に祀られていたことが窺い得る。また東・西の廡に祀られている諸功臣の名から、ヴェトナムにおける功臣の性格を中国のそれから類比し得

るように思われる。すなわち、名将・才将・軍事的天才とでも言うべき軍功顕著な者が功臣の主なる性格と言えよう。これら諸功臣が歴代帝王廟に従祀されるのは、その霊力・威力によって歴代帝王を守護するためと思われる。その人選についても軍功以上の何らかの規則性は見出し難い。

- 9) 武廟⁴⁹⁾：京城外の西、安寧社に明命16年(1835)に建てられた同廟の祭祀対象を整理すると表XIIのようになる。武廟は文廟が文官を専ら祀るのに対して武官の専廟である。表XIIより、正中、東・西に配された諸神がすべて中国歴代の名だたる武将であることを知り得るとともに、左・右の廡に従祀されているヴェトナムの六人の武将がその事績を別にしても四人が阮朝の人物であり、従祀される武将の数が少ないばかりか阮期に多く集中していると言えよう。その祭日は春秋二仲の文廟における祭祀の後の己日であり、致祭者は武班大臣、致祭ケ所は庭之前ということが知られる。祭日から言えば文廟の方が重視されていたと言い得よう。また阮朝初期において中国歴代の名将を祀った専廟が創られたことの意味は解し難い。文廟がその性格の一つに教育の場として儒教イデオロギーの拠点であったと思われるが、それと同じような軍事学の研究もしくは学習の場であったものか、定かでない。後考を俟つ。

- 10) 中興功臣廟⁵⁰⁾：京師香水県天禄・葦野二社に嘉隆九年(1810)に建てられた同廟は、その祭祀対象を表XIIIのように整理される。この表における祭神から同廟が18世紀末にタイソン軍と戦って軍功のあった者であることが知られる。とりわけ18世紀80年代末から90年代にかけての南圻から中圻へと進む各戦線において功績のあった諸将であり、これら諸将の慰霊と招魂をなしたものが同廟であると思われる。その意味では、以下の開国功臣廟や忠節功臣廟と同じ性格を持ち、勲功に対する論功行賞の一つとしての性格をも有したかと思われる。特に、明命3年(1822)や嗣徳

4年(1851)に至ってもなお増入がみられることは上記の性格を物語るものであろう。

- 11) 開国功臣廟⁵¹⁾：京師の香水県天禄・葦野二社の地方に、すなわち中興功臣廟の左に位置している。同廟は明命元年(1820)の建廟で、その祭祀対象は次の四人である。

- i 太師弘国公陶維慈
- iii 太保英国公阮有進
- ii 太伝静国公阮有鑑
- iv 神機營都統制永安侯阮有鏡

ともに、阮朝開国の際の功臣であるが、公位⁵²⁾を持つ四人に対しては特に功績顕著と認められたためか、別廟が設けられている。中興功臣廟において祀られている祭神に爵位を持っている者もいるが、太師、太保、太伝という三公⁵³⁾の官制が空名であったか否かは別にしても、神機營都統制であった阮有鏡を含め四人が阮朝開国前後の最高の官位に登っていたことが『大南列伝前編』第三卷 諸臣一より知られる。それゆえ、中興功臣廟との差は被祭祀者の官位の差によるものと思われる。

- 12) 忠節功臣廟⁵⁴⁾：京師の香水県天禄・葦野の二社の地分において祀られた同廟は、中興功臣廟の右に位置している。その建廟は明命元年(1820)になり、祭祀対象は、掌営郡公阮有瑞・阮久逸 以下凡 114 位を祀ったものであり、明命六年(1825)に該奇阮科堅が増入されている。祭祀は中興・開国功臣廟同様で春秋の社祭後の甲日になされる。また致祭者も中興・開国功臣と同様で武班一品大臣が当る。建廟ケ所・建廟理由・祭祀時期、致祭者がともに共通していることから、国家の功臣祭祀の中核として中興功臣廟・開国功臣廟・忠節功臣廟が位置しており、その下に後述する恩祀壇があったものと思われる。

- 13) 恩祀壇⁵⁵⁾：京師香水県天禄・葦野の二社の地分に位置することから、中興功臣廟の左に同壇が在ったことが解る。明命元年(1820)に設壇され、内外で戦死した官兵を正中に祀り、左右に各々王事に精勤した諸職官の霊と王事に精勤した吏卒の霊が祀られていること

が知られる。その祭日は春秋の功臣祭後の乙日で、致祭者は承府官が当る。同壇は先の功臣祭祀三廟（中興・開国・忠節）に比して、祭祀期日、致祭者が異り、祭日においては功臣祭祀後、致祭者においても大臣ではなく承府官と低いことから、祭祀対象の功の内容並びに被祭祀者の官位によって差をつけて祀られたものと思われ、上記功臣祭祀三廟より低いものと考えられていたと思われる。

- 14) 河伯廟⁵²⁾：京師の富禄県河中社に位置している同廟は嘉隆14年（1815）の建廟であり、その祭神は河伯であることが知られる。順直港を臨む同社において、春秋二仲の致祭が行なわれる。祭日は会同廟後の一日で、致祭者は地方官がこれに当る。
- 15) 南海竜王廟⁵³⁾：京師の順安汎の沙分に位置する同廟は、嘉隆の初期には京師の香水県陽春社に位置して順安海口神祠という名であった。それを嘉隆12年（1813）に順安汎沙分に移し、明命3年（1822）には南海竜王廟と改名している。その祭祀対象は次の四位である。

左	正 中	右
順安海口神位 ⁵⁴⁾ 思賢海口神位 ⁵⁵⁾	南海竜王神位	河伯神位

この四位の祭神より、同廟が水神の諸位を祀ったもので、南海竜王が順安海口・思賢海口神位や河伯神位に先んじて正中に祀られていることは四位の水神相互の系列を窺わせていると思われる。祭祀の神位序列からみれば左が右に優れていることより、南海竜王神位—順安海口神位—思賢海口神位—河伯神位の順になる。各神位は各自の専祠を持っているが、その立祠ヶ所が海口・汎口部、臨港部といった地域に多いことも水神が海と河を司る神位であるが故か、それとも海口部に神位を配して海からの侵略に備えんとしたものか推測の域を出ない。後考を俟つ。祭日は、春秋二仲をもって祭り、社祭の後の癸日、及び仲冬の上癸日であり、致祭者は地方官である。

- 16) 風伯廟⁵⁶⁾：同廟は京師順安汎沙分に在るこ

とより、南海竜王廟に隣接していることが知られる。すなわち同廟は南海竜王廟の左に位置している。明命7年（1826）の建廟で、次のような三位が祭神として祀られている。

左	正 中	右
雲 師	風伯之神	雷 師 ⁵⁷⁾

この三位より、同廟が風伯之神を祀ったものであると同時に、風によってもたらされると考えたのであろう雲や雷を司る神、すなわち、雲師・雷師が左右に祀られている。風が神位として祀られることには、風を必要とする航海があったものか、農耕との関りかその祭祀理由は詳ではないが、自然現象をも統轄する立場にあると考えられていた皇帝が風伯を祀らせたことは理解し得る。祭日は春秋の二仲をもって祭られ、社稷の後の巳日である。致祭者は二・三品官がこの任に当る。

- 17) 雨師廟⁵⁸⁾ 京師の香水県陽春社に、明命7年（1826）に建てられた同廟の祭祀対象は、以下の三位である。

左	正 中	右
雲 師	雨師之神 ⁵⁹⁾	雷 師

この三位より、同廟が雨師の神を祀るとともに、雨を降らすとヴェトナムの人は考えたであろう雲師と雷師をも併せ祀ってある。天界を司る神として前の風伯とともに雨師・雲師・雷師を数えることは中国においても古くからみられ、ヴェトナムは天候を解釈する諸神の機能を文字通りの神として祀ったにすぎない。その意味では極めて中国的な考え方を体現した廟と言えよう。また、その祭神から風伯廟との類縁が窺われる。また、雲師と雷師は雨師の神の属神ではなく、風伯の神の属神でもなく、独立した神位と考えられる。すなわち、両師は風伯・雨師廟において共通して従祀されており、どちらかの属神と考える由縁に欠けるためである。雨師廟の致祭は春秋二仲をもってなされ、その祭日は社稷の祭りの後の巳日に当る。致祭者は二・三品官が当

る。

以上の諸壇・廟の他にも火神廟⁸³、火礮神廟、宗廟系列の諸帝廟、すなわち太廟・世廟・肇廟・興廟といった諸廟、さらに広い意味での歴代の諸帝王を祀った廟がある。いま、国家祭祀中の壇廟を致祭者⁸⁴によって分類すると表XIVのようになる。また、第1節で述べた各祭祀系列を上述べた諸壇廟にあてると表XVのようになる。また壇廟の致祭日別の分類をすると表XVIのようになる⁸⁵。本節では国家祭祀としての壇廟の特長を表XIV～XVIによって明らかにすることとまとめたい。

まず致祭者による分類であるが、壇・廟の国家祭祀としての重要性が致祭者の階品から知り得ると思われる。すなわち、諸種の壇廟の中でも南郊壇を筆頭として宗廟祭祀⁸⁶がそれに次ぎ、社稷壇、文廟、武廟、功臣三廟（中興・開国・忠節功臣廟）、風伯廟、雲師廟、歴代帝王廟、火礮神廟、城隍廟、恩祀壇、会同廟、河伯廟、南海竜王廟、火神廟と続く。すなわち、表XV中の内容別系列で言えば、南郊壇に次ぎ宗廟祭祀系列、社稷の祭祀⁸⁷、文廟・武廟の祭祀、功臣祭祀系列、雲雨風雷祭祀系列、歴代帝王廟祭祀系列、天下神祇祭祀系列、山海江沢祭祀系列の順に国家祭祀内の位置が規定される。このことから、阮朝初期においては南郊の天地、宗廟、社稷が最重視され、文廟・武廟・功臣廟が次いで重視されていると言い得よう。このことは表XVIの致祭日別分類からも首肯される。この祭祀序列は各廟の祭神や陪神をも含み地域祭祀や一所一祠的祭祀にも及ぶものと思われる。それゆえ、上述した祭祀序列が国家祭祀の層をなすものとしての横軸を、各祭神と陪神との内容上の従祀された系列が縦軸をなし⁸⁸て国家祭祀の構造をなしていると思われる。

結 論

第1節、第2節に於ける考察を踏まえて次の2点すなわち、阮朝初期に於ける国家祭祀が黎朝祭祀に比して強化されたことと、阮朝初期に於ける国家祭祀の構築過程を論ずることとで結論

としたい。

強化というには黎朝祭祀との比較を前提としている。しかし H. Maspero 氏の神蹟の研究⁸⁹より明らかなように、18世紀において礼部大臣によって各地の神蹟は統合され、村落祭祀が国家祭祀の中に取り込まれて行く過程として黎朝祭祀は把握されているに過ぎない。この黎朝祭祀制は『類誌』礼儀誌「祭告稷誓之礼」に述べられ、村落祭祀はとりわけ「百神祭」の項に窺い得る。しかし、タイソン党の乱以降の黎末の混乱は著しく、祭祀制もその跡形を留めないほどであったと思われる。それゆえ、阮朝初期においては、全く新たな祭祀体系を以前の黎朝祭祀に重ねたものとも推われる。よって、ことさらに比較することによって祭祀強化を論ずるのではなく、先に論じた国家祭祀の諸壇・廟の祭祀過程を阮朝初期の宗教政策として位置付けることにより、強化の実質について論じたい。

阮朝初期における国家祭祀の構築課程は、個々の壇・廟について第1節・第2節で述べた。それぞれを阮朝初期に位置付けると、嘉隆年間に於いては、その初期すなわち元年から9年の間に文廟のほぼ3分の1、会同廟の2分の1強が、新たに建廟されるか修築されている。このことから嘉隆年間における国家祭祀の内実が、全国諸省に分布する文廟と会同廟祭祀に重点があったことが知られる。さらに同時期に建祠された主要な祠・廟・壇を見ると原廟が嘉隆2年(1803)に、澄国公廟が嘉隆3年(1804)に建廟されており、嘉隆年間初期に宗廟祭祀の確立が見られたことが知られる。次に顕著な傾向として、表忠祠が富安省に嘉隆元年(1802)に建祠されており、中興功臣廟が京師に嘉隆9年(1810)に建廟されている。このことから嘉隆初期における功臣祭祀の重視を解し得よう。また嘉隆5年(1806)には南郊壇が建壇されており、国家祭祀の頂点に皇帝が天子として位置することによって、ヴェトナム全土の天神・地祇や山神・水神を統ぶる立場に同皇帝が立ったことを解し得る。この他、嘉隆4年(1805)には清化省に黎諸帝廟が移建され、嘉隆8年(1809)には京

師に黎聖尊廟が復建されていることから、歴代の帝王廟に対する祭祀が重視されたことを知り得る。また、嘉隆10年(1811)承天府に、又嘉隆12年(1813)京師に於ける邵陽夫人祠の建祠並びに嘉隆12年(1813)の南海竜王廟の建廟は嘉隆期に於ける水神の代表として両祠廟が尊崇されていたことが窺われる。

次いで明命年間になると社稷壇の85%強が建壇され、また先農壇の92%強が建壇されている。その建壇期も明命13年(1832)から明命21年(1840)までの9年間に集中していることが知られる。このことから明命年間に於いては文廟・会同廟に対する全国諸省に於ける分布下での祭祀に加えて、社稷壇と先農壇の全国的分布体制が確立されたことが知られる。このことは、文廟が同年間に8廟建廟もしくは重修されていることから、一層首肯し得よう。また明命元年(1820)の開国功臣廟や忠節功臣廟の建廟、恩祀壇の建壇によってその功臣祭祀の一層の重視を、また明命元年(1820)の河神廟、同3年(1822)の祈風廟、同6年(1825)の思賢海口神祠、同7年(1826)の雨師廟・風伯廟、同16年(1835)の竜王廟の建廟・建祠は邵陽夫人・南海竜王に対する降雨を中心とした祈祷内容の変化を物語っていると解される。

次いで紹治年間に至って、城隍廟が紹治元年から同6年(1841—46)の6年間に61%強の集中的建廟を見せている。それゆえ、紹治年間に於ける道教祭祀の混入と隆興を見てとることができよう。このことは、紹治2年(1842)の南定省に於ける関聖廟の建廟、紹治4年(1844)の京師に於ける僊娘祠並びに関公祠の建祠によっても確認され得る。

次いで嗣徳年間に至ると、山川壇の83.3%が嗣徳3年(1850)から同6年(1853)の4年間に建壇されたことが知られる。この嗣徳初期の山川壇の全国諸省への建壇によって、初めて一省ごとに三壇三廟の制とでもいふべき分布特性が見られるようになるのである。この時期、嗣徳5年(1852)の旌忠祠の重修、同11年(1858)の賢良祠、忠義祠の建祠により、この時期にあ

っても功臣廟祭祀が一特性を示していたことを解し得る。

以上のような阮朝初期嘉隆帝期・明命帝期・紹治帝期・嗣徳帝期の祭祀特性が、主に三壇三廟の全国諸省に対する分布を軸として指摘できるものと思う。また、紹治年間を除いて功臣祭祀が重視されたことが同様に指摘し得る。この三壇三廟が黎朝期祭祀に関する史料から全国的分布を持っていたものと証するには難い。さらに、黎末の戦乱下での荒廃とその深化は阮朝初期に於ける国家祭祀の強化を一層顕著なものとなしたであろうと思われる。このことは祭祀対象の全国各省への広がり、祭祀内容の多様化・建壇・建廟期特性として阮朝初期に於ける国家祭祀の一性格を物語っていると結論付け得よう。そしてかかる性格を帯びた中で祭祀系列は補完され、その頂点に立つ皇帝の天子としての地位を築き上げたものと思われる。この余りに中国祭制の具現が、阮朝初期ヴェトナムの国家祭祀の特徴とも言い得よう。

註

- (1) 寧順道においては全くこの壇廟が観られないが、これは当地が省ではなく道であるという行政組織上の差に起因するものと考えられる。この地はその建置沿革を『一統志』寧順道によってみると、古占城地、本朝考明皇帝丁丑六年(1697)、拓置平順府安福縣潘郎道。初府縣未設員。只設道員文武各一、管治之隸于營。明命四年(1823)始設平順治府。兼理安福縣、省潘郎道。六年(1825)別置安福縣知縣。十三年(1832)分平順府地為二。其東北為寧順府。置知府兼理安福縣。又增設經豐縣為府。統轄隸于平順省。同慶元年(1886)以安福縣之上游諸總設為土縣及蠻縣。三年(1888)改隸慶和省。而以經豐縣、仍隸平順省。成泰十三年(1901)改為寧順道、置管道並典學・掣辦・經歷候補各一。領縣三。とあることから知られるように、寧順道となったのは成泰13年(1901)に至ってのことであり、それ以前は平順省に属していた。元来が占城の地であったことから解るように少数民族であるチャム族の地であり、本稿の対象とする阮朝初期であっても未だその支配が充分浸透していたとは思われ

- ない。このような行政上の位置からしてこの地は20世紀に至ってもなお道であって、三壇三廟に対する祭祀は平順省を以て代えられていたことが解せられる。
- (2) 清化省・乂安省・河静省において文廟が複数存在しているのは省レベルの文廟、府レベルの文廟、県レベルの文廟とが重層しているためで、一省一文廟、一府一文廟、一県一文廟の原則は貫かれていることが各文廟の地理的分布から知りうる。府や県のレベルにまで文廟が建てられたことは、科举制度の浸透と、文紳層の増加をも意味しているようだが、清化・乂安・河静の隣接する3省でだけにこのような建廟があった理由は定かではない。
- (3) 黎末・阮初の南圻における建置沿革については、『一統志』辺和省「建置沿革」、同書嘉定省「建置沿革」に詳しい。
- (4) 南部移民については Lê Xuân Giáo “Hai Trào lưu di dân Nam Tién” Việt Nam khảo cổ Tập san số 6. Saigòn 1970 pp. 162—183 に詳しい。
- (5) メコンデルタの自然景観と開発を簡見したものに、菊池一雅『ヴェトナムの農民』古今書院1966がある。同地に対する阮朝支配の浸透については pp. 83—85 を参照されたい。
- (6) 『一統志』京師 南郊壇の項によると 在京城外之南、安舊社、南向 嘉隆5年(1806)建壇制三成、砒以磚石。第一成、正中案合祀天地、左配一案奉太祖嘉裕皇帝、右配一案奉世祖高帝、左配二案奉聖祖仁皇帝、右配二案奉憲祖章皇帝、左配三案奉翼宗英皇帝。(中略)第二成、從壇八案、左一大明、左二周天星宿、左三雲雨風雷、左四太歲月將、右一夜明、右二山海江澤、〔原川澤、紹治九年(1849)改〕肇祥啓運興業天授孝山順道謙山山神、右三垤陵墳衍、右四天下神祇。(中略)四面各關洞門三。牆外之東北為神庫・神厨、西南為齋宮。砌限牆左右各關門一、門外建左右廂及尚茶房・尚膳所。謹按嘉隆元年(1802)、設壇于安寧社郊分、合祀天地、以建元告、又以武成告。五年(1806)營建今所。歲以仲春三吉日卜祭。明命二十年(1839)改為季春望以前三吉日。嗣德元年(1848)又以仲春。同慶三年(1888)改定子・卯・午・酉三年一郊、以仲春三辛日卜祭。均親駕詣行禮。
- (7) Leopord Cadière “Le Sacrifice du NamGiáo” ‘Croyances et Pratiques Religieuses des Vietnamiens’ Tome 1 pp. 85—128
Toan Anh “Tề Nam Giáo” Tin Ngu’ong Việt Nam I, Saigòn 1969 pp. 261—268
- (8) 『類誌』卷之二十五 礼儀誌 祭告祈禳之礼 社稷壇 李太尊天聖感武二年(1045)九月 立社稷壇于長廣門外、四辰祈穀とあり、李仁尊竜符五年(1105)の記事と考え併せると、社稷壇が長広門外の南郊に於いて祀られていたことが知られる。
- (9) 山田統「占卜と祭祀」窪徳忠・西順蔵編『中国文化叢書 6: 宗教』大修館書店 1967 p28
出石誠彦「社を中心としてみたる社稷考」『支那神話伝話の研究』1942
- (10) 『一統志』京師 恩祀壇の項より 在中興功臣廟之左後、西向 明命元年(1820)設舊忠節功臣壇所。致祭内外死事官兵。正中設牌位一、題本朝勤勞王事職官牌位之靈。左右各設牌位一、並題勤勞王事吏卒之靈、東西相向。歲以春秋祭 功臣 後乙日、命承府官致祭。
- (11) 『一統志』富安省 山川壇の項より 在福履村 成泰11年(1899)移焉 原在龍淵村
- (12) André Coué “Dotrines et Ceremonies Religieuses du Pays d’Annamite” Bulletin de la Société des Etudes Indochinoises de Saigòn 1933 no.3 pp. 129—130
- (13) 先農壇が農業生産の農稷を祈念するための壇であるとの性格づけについては『一統志』京師同壇の項参照。また André Coué; op. cit. p. 130 参照
- (14) 『一統志』河静省 厲祭壇の項より 在石河縣大泰社。富安省 迎春壇の項より 在同春縣平隆村との在地が知られる。
- (15) 河静省と富安省には共に先農壇が見られない。先農壇が見られないのは両省に限ったことではない。すなわち、寧順道を例外として除いても広治省と承天府にも先農壇は見られない。それゆえ、地理的關係だけから先農壇と厲祭壇との結びつきを結論づけることはできない。
- (16) 『一統志』辺和省 城隍廟の項より 在省城西、福正縣平城村 紹治元年(1841)建、常年春秋仲祭以中庚日。
- (17) 河伯・風伯・雨師といった諸神は、必ずしもヴェトナム民衆の特徴的祭神であるとは言い難く、古代中国においても同神に対する祭祀が認められ

- る。山田統『前掲論文』p26 参照。
- (18) ここで言う歴代帝王廟は各歴朝の帝王諸廟を意味する。
- (19) 中圻の清化・父安を北圻に含めて考えると、この北圻平野部に歴代帝王廟が集中している傾向は、さらに顕著なものとなる。
- (20) 祭祀内容から判断すると、祭祀対象が水神でなくとも水神系列に入るものもあるが、ここでは祭祀対象上広い意味で水神と関わりを持つと考えられるものとした。
- (21) 『同慶御覽地輿誌図』p145 参照。
- (22) 宗廟の祭祀については、京師皇城内に置かれている五廟が中心をなす。すなわち始祖廟としての太廟と四親廟としての世廟・肇廟・興廟・共宗廟である。『一統志』京師 皇城付図によれば、四親廟は太廟に左右しておかれ昭穆が見られる。ただ京城内における宗廟祭祀は阮朝の祖先祭祀にすぎず、祠・廟・壇として分布する諸省の祭祀との関わりは薄いものと思われる。清化省の原廟と澄国公廟を加えると天子の宗廟祭祀数は七廟となることから、原廟と澄国公廟が宗廟祭祀系列であることが知られる。なお、宗廟祭祀を阮朝が重視していたことは南郊壇における祭祀から知られると共に、君主権の絶対化を知る一指標となるものとも思われる。
- (23) 功臣祭祀の内容には勲功のあった臣下、とりわけ武勲を立てた者の功績を賞揚する場合と、忠臣・義臣の将士の慰霊と招魂をなす場合とがある。伝承中の諸功績を立てた者に関しては英雄神信仰とも複合するものと思われる。
- (24) 関聖が中国の関羽を祀ったものであろうことは推察に難くない。しかし、その祭祀内容が定かでないため、関聖廟に関しては本文中で分けたように一応区別して保留した。『一統志』南定省 関聖廟の項より、在省城(美禄縣)南門美禄縣明郷社 紹治2年(1842)建。父安省 関公廟の項より 在省城南、宜禄縣地 明命18年(1837)属省員造 今列在祀典。宣光省 関公廟の項より 在咸安縣綺羅社(省城)南 明命14年(1833)建 山西總督黎文德、進兵農文雲。過庙謁展賊平。蒙準給贈敕。興化省 関公廟の項より 在水尾明郷廟
- (25) 『一統志』平順省 神農廟の項より 在禾多縣平水村 炎帝・黄帝・后稷三位 俗名神農廟。順城正鎮阮文振奏請祀丞一人、奉準許之。
- 神農廟における祭祀対象である炎帝・黄帝・后稷の祭祀が中国古代三皇五帝神話に位置することは言うまでもないが、これらの神々がヴェトナムで祭祀対象となっていることに、ヴェトナムが Smaller Dragon と呼ばれる一つの由縁があるように思われる。
- (26) 『一統志』平順省 建置沿革 禾多県の項参照。
- (27) 『一統志』広平省 三座廟の項より 在省城北 豊禄縣地 明命2年(1821)建
- (28) 『一統志』京師 武廟の項より 在京城外之西安寧社、明命16年(1835)建。正中案奉周尚父・姜太公牌位、東序配齊管仲・呉孫武子・漢韓信・唐李靖・李晟・明除達六位、西序配齊田穰苴・漢張良・諸葛亮・唐郭子儀・宋岳飛五位、左廡從祀陳朝陳国峻・本朝阮有進・尊室會・右廡從祀黎朝黎魁・本朝阮有鑑・阮文張。歲以春秋二仲、文廟祭後一日、用巳日派武班大臣致祭。庭之前豎武功石碑三〔明命十七年(1836)立、嗣德二年(1825)繼立〕。
- (29) 『一統志』京師 火神廟の項より 在香茶縣富春社 明命6年(1825)建 一座三間。歲以六月二十三日、地方官致祭。
- (30) 同様な地方官の致祭になるものに河伯廟や南海竜王廟がある。このような地域性の強くみられる神位に対して、風伯や雨師のような天の内容に関する神位に対しては、二三品官による致祭である点は、国家祭祀の一傾向を表していると思われる。
- (31) 『一統志』京師 火燄神廟の項より 在富春社 明命7年(1826)建。一座三間。歲以九月初一日、神機管衛致祭。同慶元年撤、合祀于火神廟。
Leopold Cadière “Le Culte des Armes à feu” Bulletin des Amis du Vieux Hué, Ha noi 1925 pp. 121—126
- (32) 歴代帝王廟祭祀の基本的性格は各王廟の社稷を受けつぎ、諸帝の事績を賞揚することにあつたと思われるが、占城や真臘の皇帝まで祀っているのは、鎮魂を目的とするとともに、ヴェトナムが領土国家として血縁性を失ってきたために、被征服族である占城や真臘といった亡国の社も祀ることになったものと思われる。
- (33) ヴェトナムにおいて天地が合祀されていることはヴェトナムの一特性と思われる。すなわち、中国では天と地は別に祀られているのに対しヴェトナムでは天地が一体なものとして祀られている。

- (34) 社稷壇をはじめとする三壇三廟は全国諸省においてみられるが、『一統志』凡例に山川・社稷・諸壇、其規制特詳於京師志。余省但志其所在。他如規制無甚異者略之。とあり、京師において特に詳しく、他の省においては異例なき場合には略してあることが知られる。それゆえ、本稿においては京師の記載に依った。
- (35) 『一統志』京師 先農壇の項によれば、在京城内西北、厚生・安宅坊 明命九年(1828)建壇一成、制方、南向。謹按明命八年(1827)、聖祖仁皇帝議復古制、開耨田、行躬耕禮、歲以四月下旬扞吉举行。承天府尹欽命致祭。又按明命九年(1828)、建具服殿于耨田所、又于永澤園營建務本堂一座、以為演耕之所。十一年(1830)、撤減具服殿。紹治五年(1845)、改建務本堂于豐澤園。嗣德三年(1850)、準于具服舊址、暫建大次一座、以為駐蹕之所。成泰十五年(1903)、觀耕臺及収穀亭左右從耕家再行修補。十七年(1905)、神倉從耕家二連量減再構辨、每連各三間。
- (36) 『一統志』承天府 山川壇の項によれば、在香水県楊春上社 嗣德5年(1852)建
- (37) 『一統志』京師 文廟の項によれば 在京城外之西、安寧社、南向。廟制、正堂五間二厦、前堂七間、東西廡各七間。正中龕奉至聖先師孔子神位、左右四龕設顔子・曾子・子思・孟子四配神位、東西案設閔損・冉耕・冉雍・宰予・端木賜・冉求・仲由言・偃卜・商頤・孫師・有若・朱熹十二哲神位〔原十哲、明命八年(1827)、準升列有若・朱熹二位〕、東西廡十四案以先賢先儒從祀。庭前建碑亭二、左碑恭錄憲祖章皇帝諭外感不得親政。謹按、國初文廟在朝山社、祀以神像。睿尊庚寅五年(1770)、移于隆湖社。嘉隆七年(1808)、移今所、埋藏神像、改題碑位。歲以春秋二仲上丁親祭。八年(1809)、準以丑・辰・未・戌每三年一親祭、命文班大臣攝祭。明命十六年(1835)、改定春祭以郊後丁日、秋祭以八月中丁。又按、明命・紹治・嗣德年間、奉列聖辰常親往行釋奠禮、又命駕視學。成泰七年(1895)、再行修補。
- (38) 『一統志』京師 都城隍廟の項によれば、在京城内之西衛國坊 嘉隆8年(1809)建 正堂・前堂各三間、左右從祀各五間。正中祀都城隍、左右配以諸省城隍。明命二十年(1839)、裁省配位。歲以春秋二仲祭社稷後庚日、命武階官致祭。成泰二年(1890)、撤下重修俾得淨好。
- (39) 『大南一統志』京師 会同廟の項によれば、在朝山社 嘉隆2年(1803)建、明命7年(1826)移。嘉隆二年(1803)建 于順安汛、明命七年(1826)移今所。廟制、三間二厦。正中間設牌位一、書上等陽神列位、左一間設牌位二、一書中等陽神列位、一書下等陽神列位、右一間隔以帷幕設牌位三、一書上等陰神列位、一書中等陰神列位、一書下等陰神列位、東厦設牌位一、書當境土地・龍神・五方・河伯・水官諸神位、西厦設牌位一、書先師・土方・竈君・住宅諸神位。歲以春秋、命地方官致祭。
- (40) 中国においては陰陽を神として祀ることはみられないように思う。陰陽をも神として祀って受容する仕方にヴェトナムの特異性を窺い得よう。
- (41) 神を上・中・下等に分けるとする特長は『類誌』礼儀誌 祭告禱誓之礼 百神祭の項に 黎神尊慶德四年(1652)、定春祭禮物例、令上下中等諸祠。
- とあることから、慶德四年(1652)からその区分はあったものと思われる。その行礼上の差は『類誌』同項に詳しい。ちなみにこの神を三等に分ける考え方は日本においてもみられ、『古事類苑』神祇部 八社格 の項に 神有三等、大社・中社・小社は也。
- とある。ただ、ヴェトナムにおける上・中・下の区別が社格の区別によるのか祭神そのものに関わる区別かは定かでない。後考を俟つ。
- (42) 『一統志』京師 歷代帝王廟の項によれば、在京城外之南、陽春社、南向 明命4年(1823)建廟制、正堂五室、東西廡各五間。中一室、正中伏羲氏、左一神農、右一黃帝、左二唐堯、右二虞舜、左三夏禹、右三商湯、左四周文、右四周武。左一室、涇陽王・懿龍君・雄王・土王・丁先皇。右一室、黎大行・李太祖・聖尊・仁尊。左二室、陳太尊・仁尊・英尊。右二室、黎太祖・聖尊・莊尊・英尊。東廡、風后皐陶龍伯益、傳說、太公望召穆公虎・阮旬・黎奉暁・蘇憲誠・陳日燭・張漢超・阮熾・黎念・黃廷愛。西廡、力牧后夔、伯夷・伊尹・周公旦召公奭方・叔洪獻・李常傑・陳國峻・范五老・丁列・黎魁・鄭惟俊・馮克寬。成泰十四年(1902)重修。謹按、明命十一年(1830)、準改祀土王于文廟從祀之列、再省黎英尊一位。十六年(1835)、準遷祀太公望于武廟正案。又按、祭日歲以春秋二仲涓吉。明命七年(1826)、準定如遇

慶典駕詣行禮，餘著皇子諸公欽命，在正旦端陽，簡派文官三品以上一員充之。十一年(1830)，停省端陽禮。

- (43) 土王を皇帝もしくはそれに準ずるものとするか否かは史家の歴史観によって異なる。例えば『全書』においては外紀全書 卷之三 に土紀があり、「土王」として扱われているのに対し、『欽定越史通鑑綱目』においては「土王紀」を見出すことはできない。
- (44) 明命11年(1830)になって黎の英尊と土王が歴代帝王廟からはずされていることより明命同年期における史観の変化を窺わせる。
- (45) 『一統志』京師 武廟の項によれば，在京城外之西，安寧社，明命16年(1835)建 廟制，正楹三間二厦，前楹五間，左右兩廡各五間。正中案奉周尚父・姜太公牌位，東序配齊管仲・吳孫武子・漢韓信・唐李靖・李晟・明徐達六位，西序配齊田禮菑・漢張良・諸葛亮・唐郭子儀・宋岳飛五位，左廡從祀陳朝陳国峻・本朝阮有進・尊室會，右廡從祀黎朝黎魁・本朝阮有鑑・阮文張。歲以春秋二仲，文廟祭後一日，用巳日派武班大臣致祭。庭之前豎武功石碑三〔明命十七年(1836)立，嗣德二年(1849)繼立〕。四圍繚牆，前三關門，樓一。牆之外有宰牲所。
- (46) 『一統志』京師 中興功臣廟の項によれば，在香水縣天祿・葦野社 嘉隆9年(1810)建正堂・前堂各七間。祀安邊郡王尊室旻・懷國公武性以下凡二百五十八位。十三年(1814)，增入掌中軍郡公阮文張・掌神武軍郡公范文仁二位。明命三年(1822)，又增入都統制郡公阮文謙・掌象軍郡公阮德川・掌營武文諒・阮廷得四位。嗣德四年(1851)，又增入鄧德超・黎光定・鄭懷德・吳仁靜・阮廷德・范登興・張進寶・阮文孝一位。祭以春秋社祭後甲日，命武班一品大臣致祭。
- 『寔錄』正編 第一紀 卷之四十の項に中興功臣廟の記事が詳しい。
- (47) 『一統志』京師 開國功臣廟の項によれば，在中興功臣廟之左 明命元年(1820)建 正堂・前堂各七間。祀太師弘國公陶維慈・太保英國公阮有進・太傅靜國公阮有鑑・神機營都統制永安侯阮有鏡凡四位。祭日與中興功臣廟同。按開國功臣舊未有專廟，遇春秋祭，設壇于中興功臣廟之左。至是即基壇建廟祀之。

『寔錄』正編 第二紀 卷之四 秋七月の項に

詳しい。

- (48) 公位とは，太師・太保・太傅の三公と都統制をここでは意味するものとする。
- (49) 『寔錄』正編 第一紀 卷二十四 に記されている文階品級によれば，文階一品之上に「三公」とあることから空名とは思えない。
- (50) 『一統志』京師 忠節功臣廟の項によれば，在中興功臣廟之右 明命元年(1820)建 正堂・前堂各五間。祀掌營郡公阮有瑞・阮久逸以下凡一百十四位。六年(1825)，增入該奇阮科堅一位。祭日與開國功臣廟同。按忠節功臣 舊 未有 專廟。春秋祭，設壇于中興功臣廟之右。明命初，以此處有水道，乃于左後西向設壇祀之。七年(1826)，壅塞水道，改建廟于其右。成泰二年(1890)，準將功臣三廟〔中興・開國・忠節〕撤下，于中興廟舊基，構作一座。
- 『寔錄』正編 第二紀 卷之四 秋七月の項に詳しい。
- (51) 『一統志』京師 恩祀壇の項によれば，在中興功臣廟之左後，西向，明命元年(1820)設舊忠節功臣壇所。臨祭内外死事官兵。正中設牌位一，題本朝勤勞王事職官列位之靈。左右各設牌位一，竝題勤勞王事吏卒之靈，東西相向。歲以春秋祭功臣後乙日，命承府官致祭。
- (52) 『一統志』京師 河伯廟の項によれば，在富祿縣河中社順直港 嘉隆14年(1815)建 一座三間。歲以春秋二仲祭會同廟後一日，命地方官致祭。
- (53) 『大南一統志』京師 南海竜王廟の項によれば，在順安汎沙分 嘉隆12年(1813)移 嘉隆初在香水縣陽春社，十二年(1813)，移今所。名曰順安海口神祠，明命三年(1822)，改今名。一座三間。正中南海龍王神位，左順安海口思賢海口神位，右河伯神位。歲以春秋二仲祭社後癸日，及仲冬上癸日，命地方官致祭。謹按，明命年間聖祖仁皇帝御製靈異記勒碑，建亭于廟門之左。
- (54) 順安汎沙分に南海竜王廟が位置すると共に南海竜王廟の左に風伯廟が位置する。このことから順安海口の神は水神中であっても，とりわけ靈威の強い神位であることが知られる。順安(海)汎口の沿革については、『一統志』承天府上「關汎」の項に詳しい。
- (55) 『一統志』京師 思賢海口神祠の項によると，在思賢汎口 明命6年(1825)建 嘉隆年間附祀于順安海口神祠。一座一間。原名思容，紹治元年

- (1841), 改今名。春秋二仲, 汎守禦致祭。
- 『一統志』 承天府 思賢神祠 の項によると, 在富祿縣榮和社山西北 明命 6 年 (1825) 敕建 思賢海口之神 舊附祀于南海龍王廟
- (56) 『一統志』 京師 風伯廟 の項によると, 在南海龍王廟之左 明命 7 年 (1826) 建 正堂・前堂各三間, 合為一座。正中祀風伯之神, 左雲師, 右雷師。歲以春秋二仲祭社稷後巳日, 二三品官致祭。
- (57) Hoàng Trọng Miên ‘Thần Sét’ “*Việt Nam Văn Học Toàn Thư I*” Quốc Hoa Xuât Bản Sài Gòn 1959 pp.62~63 において雷神が, また ibid. pp.64—65 においては ‘Thần Gió’ の項があり風伯の神の祭祀が紹介されている。
- (58) 『一統志』 京師 雨師廟 の項によると, 在水縣陽春社 明命 7 年 (1826) 建 正堂・前堂各三間, 合為一座。正中祀雨師之神, 左雲師, 右雷師。歲以春秋二仲祭社稷後巳日, 二三品官致祭。
- (59) Hoàng Trọng Miên ‘Thần Mu’a’ *op. cit* pp. 63—64 に雨師之神に対する紹介がある。
- (60) Hoàng Trọn Miêng ‘Thần Lũ’a’ ibid, p. 65 に火神についての紹介がある。
- (61) 致祭者については礼部に關係する致祭専門の官僚がみられる。詳しくは『聚例』卷之貳 の「大南故典吏科輯編」文階以下に詳しい。とりわけ従四品から祠祭司・祠祭使といった祭祀官僚の存在が確認される。このことは, 民間信仰を国家的祭祀体系を確立することで一般の信仰から分離し, 国家的宗教としての特権的位置を確保しようとしたとの本稿での結論を補強するものと思われる。
- (62) 祭日は春秋二仲を以てなされた場合が多い。それゆえ, 秋に於いても同様の致祭順で日程表ができていたものと思われる。また, 火神廟では六月二十三日を, 火礮神廟では九月初一日を祭日としている。歴代帝王廟においては春秋二仲の吉日を選んで致祭されている。しかし, 致祭日の基本的な規準は南郊壇の春祭を以てするものと思われる。阮朝初期においても, 南郊の祭りをなす日を決定する規準は二転・三転している。しかし, 基本的には仲春をもって致祭日に当てるようであるが, その前後の吉日を選ぶことによって決定される。詳しくは『会典』 卷八十五 礼部 祭統「祀期」の項を参照。
- (63) 宗廟祭祀の致祭者については, 『会典』卷十 吏部 官制「左右祠祭二司」ならびに卷四 尊人府 職制「撰祭承祭」に詳しい。
- (64) 内容別系列においては内容を把える規準が明らかでない。祭祀対象を中心とすれば天・地・人の三分類が可能であると思う。すなわち自然現象を天文・気象と地理的風土の諸様相に二分したうえで, 人文現象を加えると三分類になる。さらに各対象を細分すると分類の意図は薄れるが具体性に近づく。本稿の分類以外にも Ngyuễn Văn Khoan 氏は “*Essai sur le Đình*” Bulletin de Ecôle Français de Extreme Orient, Tome 30, 1930 p. 116 でトンキンにおける鎮守神を天神 (Thiên-thần) と人神 (Nhân-thần) に二分している。本稿では一つの分類例として表 XV のように分けた。宗廟・雲雨風雷・山海江澤・天下神祇までの諸祭祀は南郊壇の天地の祭祀に対応するものであり, 功臣・農業・歴代帝王・儒佛道教祭祀は人文現象とでも言うべき内容を持ったものとして指定した。
- (65) 表XV の内容系列から言えば農業祭祀に入るが, 社稷の祭祀は異なった意味を持つために別記した。
- (66) 横軸に考えた祭祀序列は実際に国家による祭品・祭器の差として表わされ, 『大南會典事例撮要』礼部「祀享」に凡祀有三等とあり, 大祀・中祀・羣祀によって区分される。しかし, 縦軸に考えた主神と従神の關係, 従神と陪神の關係, また内容上の類似性から同系統内での実態的從属關係は論証し難い側面を持つ。横軸の各壇廟の実態的差異を実証するものの一つに祭品がある。本稿では論及を省いたが, 『会典』卷八十五 礼部 祭統「祭品」, 『大南會典事例撮要』卷之三 礼部「祀享」, 『聚例』卷之壹「諸廟殿炤灼」並びに「年祭期合用礼品」の項に詳しい。
- これら祭品・祭期については別論に委ねる。
- (67) Henri Maspero “*Etudes D’Histoire D’Annam*” Bulletin de Ecôle Français d’ Extreme Orient Tome XVI No. 1, 1916. pp. 1—55

阮朝初期国家祭祀の一考察

 表
I

	社稷壇	先農壇	山川壇	文廟	会同廟	城隍廟	小計
高平省	1	1	1	1	1	1	6
諒山省	1	1	1	1	1	1	6
太原省	1	1	1	1	1	1	6
興化省	1	1	1	1	1	1	6
宣光省	1	1	1	1	1	1	6
北寧省	1	1	1	1	1	1	6
山西省	1	1	1	1	1	1	6
河内省	1	1	1	1	1	1	6
海陽省	1	1	1	1	1	1	6
広安省	1	1 (先農場)	1 (山川場)	1	1	1	6
興安省	1	1	1	1	1	1	6
南定省	1	1	1	1	1	1	6
寧平省	1	1	1	1	1	1	6
北圻小計	13	13	13	13	13	13	78
清化省	1	1	1	16 (省1,府1, 県14)	1	1	21
乂安省	1	1	1	9 (省1,府4, 県4)	1	1	14
河静省	1	0	1	8 (省1,府2, 県5)	1	1	12
寧順道	0	0	0	0	0	0	0
平順省	1	1	1	1	1	1	6
慶和省	1	1	1	1	1	1	6
富安省	1	0	1	1	1	1	5
平定省	1	1	1	1	1	1	6
広平省	1	1	1	1	1	1	6
広治省	1	0	0	1	1	1	4
京師	1	1	1	1	1	1	6
承天府	0	0	1	0	1	1	3
広南省	0	1	1	1	1	1	5
広義省	1	1	1	3 (他に 2文祠)	1	1	8
中圻小計	11	9	12	44	13	13	102
辺和省	1	1	0	1	1	1	5
嘉定省	1	1	0	1	1	1	5
定祥省	1	1	0	0	1	1	4
永隆省	1	1	0	0	1	1	4
安江省	0	0	0	0	0	1	1
河僊省	0	0	0	0	1	0	1
南圻小計	4	4	0	2	5	5	20
全国合計	28	26	25	59	31	31	200

阮朝初期国家祭祀の一考察

表Ⅱ 文廟・会同廟・城隍廟以外の祭祀系列

諸廟の系列	主要分布地域
歴代帝王廟系列の諸廟	北圻平野部（38廟）、中圻（9廟）
宗廟祭祀系列の諸廟	京師（6廟）、清化省（2廟）
水神系列の諸廟	南圻（2廟）、広平省（1廟）
功臣祭祀系列の諸廟	京師（3廟）
関公廟祭祀系列の諸廟	北圻（2廟）、乂安省（1廟）

表Ⅲ 南郊壇に祀られる祭祀対象

		左配	右配
第一成	正中案合祀	天 地	
	一案奉	太祖嘉隆皇帝	世祖高皇帝
	二案奉	聖祖仁皇帝	憲祖章皇帝
	三案奉	翼宗英皇帝	——
第二成	一	大明	夜明
	二	周天星宿	山海江澤(*)
	三	雲雨風雷	社稷墳衍
	四	太歲月將	天下神祇

(*) 肇祥・啓運・興業・天授・孝山・順道・謙山山神

表Ⅳ 社稷壇の建壇期分類

嘉隆5年	明命13年	明命14年	明命15年	明命16年	明命17年	明命20年	不 明
京 師	海 陽 乂 安 慶 和 平 定 広 治 辺 和 嘉 定	高 諒 興 宣 北 山 広 寧 平 順 広 義 定 祥	清 化	南 定	永 隆	河 内 興 安	太 原 河 静 富 安
1 壇 (3.6%)	7 壇 (25%)	12 壇 (42.9%)	1 壇 (3.6%)	1 壇 (3.6%)	1 壇 (3.6%)	2 壇 (7.1%)	3 壇 (10.7%)

阮朝初期国家祭祀の一考察

表V 先農壇の建壇期分類

明命4年	明命9年	明命13年	明命14年	明命15年	明命16年	明命17年	明命18年	明命20年	明命21年	不明
広安	京師	海陽 慶和 辺和 嘉定 定祥	高諒 興宣 北山 平順 平定 平南 広義	清化	南定	永隆	乂安	河内	興安	太原 寧平
1壇 (3.9%)	1壇 (3.9%)	5壇 (19.2%)	11壇 (42.3%)	1壇 (3.9%)	1壇 (3.9%)	1壇 (3.9%)	1壇 (3.9%)	1壇 (3.9%)	1壇 (3.9%)	2壇 (7.7%)

表VI 山川壇の建壇期分類

明命6年	嗣徳3年	嗣徳5年	嗣徳6年	嗣徳16年	嗣徳27年	不明
北寧	平平 順定	高平 太原 興安 南定 乂安 慶和 広平 承天府 広南 広義	興化 宣光 山西 河内 海陽 広安 寧平 清化	諒山	河静	富安
1壇 (4.2%)	2壇 (8.3%)	10壇 (41.7%)	8壇 (33.3%)	1壇 (4.2%)	1壇 (4.2%)	1壇 (4.2%)

表VII 諸省文廟建廟期・分類（移築・修廟期分類）

李聖尊	嘉隆1年	嘉隆2年	嘉隆3年	嘉隆4年	嘉隆8年	嘉隆13年	嘉隆16年	嘉隆17年
河内	北寧(修)	慶和	乂安	慶安	高平 諒山 (重修)	広治(移)	広義	広平
1廟 3.7%	1廟 3.7%	1廟 3.7%	1廟 3.7%	1廟 3.7%	2廟 7.4%	1廟 3.7%	1廟 3.7%	1廟 3.7%

阮朝初期国家祭祀の一考察

嘉 隆 初	嘉隆年間	明命 2 年	明命 4 年	明命 5 年	明命 6 年	明命 7 年	明命11年	明命12年
平 定	広南(移)	南 定	海 陽	嘉 定	宣 光	平 順	興化(修)	興 安
1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%

明命16年	紹治 4 年	紹治 7 年	成泰11年	不 明		廟 数	%
寧 平 (重 修)	太原(移)	山西(移)	富安(移)	清 化 河 静 京 師 辺 和	建 廟 移 築 修・重修	18廟 5廟 4廟	66.7% 18.5% 14.8%
1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	1 廟 3.7%	4 廟 14.8%		27 廟 100%	100%

表Ⅷ 城隍廟建廟期別分類

嘉隆 1 年	嘉隆 2 年	嘉隆 6 年	嘉隆 8 年	嘉 隆 初	明命 2 年	明命14年	明命17年	紹治 1 年
平 定	父 安	嘉 定	京 師	広 南	広 平	諒 山	広 義	宣 光 山 西 河 内 興 安 寧 平 清 化 辺 和
1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	7 廟 22.6%

紹治 2 年	紹治 3 年	紹治 4 年	紹治 5 年	紹治 6 年	嗣徳27年	不 明		廟数	%
高 平 太 原 海 陽 広 安 平 順 平 定 永 隆	興 化 南 定	安 江	慶 和	承 天 府	河 静	北 寧 富 安 広 治	嘉隆期	5廟	16.1%
							明命期	3廟	9.7%
							紹治期	19廟	61.3%
							嗣徳期	1廟	3.2%
							不 明	3廟	9.7%
7 廟 22.6%	2 廟 6.5%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	3 廟 9.7%			

表IX 会同廟の祭神

正中間	設 牌 位 一	上等陽神
左一間	設 牌 位 二	中等陽神
		下等陽神
右一間	設 牌 位 三 (隔以帷幕)	上等陰神
		中等陰神
		下等陰神
東 厦	設 牌 位	当境土地・龍神・玉方・河伯・水官諸神位
西 厦	設 牌 位	先師・土公・龜君・住宅諸神位

表X 会同廟の建廟期別分類

乙卯(1795)	嘉隆 1 年	嘉隆 2 年	嘉隆 3 年	嘉隆 4 年	嘉隆 7 年	嘉隆 8 年	嘉隆 9 年	嘉隆15年
嘉 定	平 定	河 内 父 安 京 師	広 義	高 平 海 陽 南 定	定 祥	辺 和	諒 山	慶 和
1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	3 廟 9.7%	1 廟 3.2%	3 廟 3.2%	1 廟 9.7%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%

嘉 隆 初	明命 2 年	明命 8 年	明命12年	明命14年	明命15年	明命17年	明命20年	明命21年
承 天 府 広 南	広 平	平順(移)	山西(移) 広 安	宣 光	興 化 寧 平 河 僊	永 隆	興 安	北寧(修)
2 廟 6.5%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	2 廟 6.5%	1 廟 3.2%	3 廟 9.7%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	1 廟 3.2%

紹治 4 年	嗣徳27年	不 明
太原(移)	河 静	清 化 富 安 広 治
1 廟 3.2%	1 廟 3.2%	3 廟 9.7%

	廟数	%
黎末期	1廟	3.2%
嘉隆期	14廟	45.2%
明命期	11廟	35.5%
紹治期	1廟	3.2%
嗣徳期	1廟	3.2%
不 明	3廟	9.7%

阮朝初期国家祭祀の一考察

表XI 歴代帝王廟の祭祀対象

中 一 室								
左四	左三	左二	左一	正中	右一	右二	右三	右四
周文	夏禹	唐堯	神農	伏羲氏	黃帝	虞舜	商湯	周武
左 一 室 丁先皇, 士王, 雄王, 貉竜君, 涇陽王				右 一 室 黎大行, 李太祖, 聖尊, 仁尊				
左 二 室 英尊 仁尊 陳太尊				右 二 室 黎太祖 聖尊 莊尊 英尊				
西 廡 力牧后夔, 伯夷, 伊尹, 周公旦, 召公爽方, 叔洪猷, 李常傑, 陳国峻, 范五老, 丁列, 黎魁, 鄭惟俊, 馮克寛				東 廡 風后皐陶竜伯益, 伝説, 太公望, 召穆公虎, 阮匐, 黎奉暁, 蘇憲誠, 陳日燭張漢超, 阮熾, 黎念, 黃廷愛				

表XII 武廟における祭祀対象

正 中 奉 案	
周尚父, 姜太公 牌位	
西 序 配 齊田穰苴 漢張良 諸葛亮 唐郭子儀 宋岳飛 (五位)	東 序 配 齊管仲, 吳孫武子, 漢韓信, 唐李靖 李晟 明徐達 (六位)
左 廡 從 祀 陳朝陳国峻, 本朝阮有進 尊室会	右 廡 從 祀 黎朝黎魁, 本朝阮有鑑 阮文張

表XIII 中興功臣廟における祭祀対象

祀 安辺郡王尊室旻, 懷国公武性 以下凡二百五十八位
(嘉隆13年(1814) 増入) 掌中軍郡公阮文張, 掌神武軍郡公范文仁
(明命3年(1822) 増入) 都統制郡公阮文謙, 掌象軍郡公阮徳川, 掌營武文諒・阮廷得
(嗣徳4年(1851) 増入) 鄧徳超・黎光定・鄭懷徳・吳仁静・阮廷徳・范登興・張進宝・阮文孝

表XIV 廟・壇の致祭者別分類

致 祭 者	該 当 壇 廟 名
皇 帝	南郊壇，太廟，世廟，肇廟，興廟，他3廟
大 臣	社稷壇
文 班 大 臣	文廟
武 班 大 臣	武廟
武班一品大臣	中興功臣廟，開国功臣廟，忠節功臣廟
二・三 品 官	風伯廟，雨師廟
文官三品以上	歷代帝王廟
神 機 管 衛	火礮神廟
武 階 官	城隍廟
承 府 官	恩祀壇
地 方 官	会同廟，河伯廟，南海竜王廟，火神廟

表XV 国家祭祀の内容別諸系列

祭 祀 系 列	該 当 壇 廟 名
宗廟祭祀系列	太廟・世廟・肇廟・興廟・恭宗廟・原廟・澄国公廟
雲雨風雷祭祀系列	祈風壇，風伯廟，雨師廟
山海江澤祭祀系列	山川壇，南海竜王廟，河伯廟
天下神祇系列	会同廟，城隍廟
功臣祭祀系列	恩祀壇
農業祭祀系列	迎春壇，神農廟，社稷壇，先農壇
歷代帝王廟祭祀系列	歷代帝王廟，他諸帝の專廟。
儒・仏・道教系列	文廟，啓聖祠

表XVI 廟・壇の致祭日別分類

致 祭 日	廟・壇名	致 祭 日	廟 ・ 壇 名
仲春三吉日	南 郊 壇		
春祭郊後甲日		春祭郊後甲日	中興・開国・忠節功臣廟
〃 乙日		〃 乙日	風伯廟，恩祀壇
〃 丙日		〃 丙日	
〃 丁日	文 廟	〃 丁日	
〃 戊日	社 稷 壇	〃 戊日	
〃 己日	武 廟	〃 己日	雨師廟
〃 庚日		〃 庚日	都城隍廟
〃 辛日		〃 辛日	
〃 壬日		〃 壬日	
〃 癸日	歷代帝王廟	〃 癸日	南海竜王廟